

サンコロナ小田社長
小田外喜夫さん

一人ひとりの力を
事業の推進力に

——国内外の有力デザイナーブランドにも早々に採用され、販売が増えている。

創業当初から培ってきた分繊技術や、原料加工から織り、染色まで、気通貫した物作り力が支持されています。たとえば、タテ糸に10層のポリエステル分繊糸を使い、「三〇糸にセルロース繊維「テンセル」を打った織物は、非常に薄くエアリーだけでなく、質感はナチュラル、独特な光を放つグラスオーガンディも、世界でいちにしかないと自負しています。元々、遮熱カーテン用に使われていたカラスパットリングという加工を衣料用の薄地織物に施したもので、アパレルから新鮮に受け止められています。

こうした特殊な薄地織物を全

てカラストックしていること
も驚かれます。2000アイテム
ざらに2000色以上。日本、イ
タリアに在庫を構え、顧客にす
ぐに届けられる体制がある。温
暖化やトレンドで、薄地織物が
通年で売れるようになったこと
も振返を後押ししました。

国際素材見本市のブルミエ
ル・ヴィジヨン（PV）パリへ
の出展などを通じ、リピーター
を増やし、取り組みも深耕して
います。昨今は薄地織物に加え
、中肉地の開発にも注力し、
提案のバリエーションを増やし
ています。

——PVパリなどの展示会も
必ず同行し、第一線を旗を振つ

「現場に体を持っていく」とを信条としています。現場の声を傳來えています。現場の隅々まで目配し、リーダーシップを執るためです。

「イキイキハートのイキイキ」経営の基本理念の下、社員個人の創造のエネルギーが、組織の目標と限りなく一致することを目指して、一人ひとりの「やりたい」という熱い思いや志が仕事であり、僕は社員が自ら実現する場所を作り、サポートするというスタンスです。

社員の望むエネルギーを最大限に発揮してもらうためであり、それが会社の成長を加速させること。

年々、全社員を集めて目標設定会議を開いています。大きな会場備えて、おのおのプレゼンテーションしてもらいます。社員は3週間準備しています。僕はその間に海外拠点のすべてを訪問し、一人ひとりと45分間面談をしています。

——新型コロナウイルス感染

拡大の影響をどう見ている。問題は消費者の気持ちが続縮していること。目先の需要は変化している。中長期的な視点に立てば、生活自体は大きく変わるものではないのだけれど、たとえば、根拠は必ず、「ライフスタイルを豊かにしたい」という欲望がある。これに、新型コロナウイルスからどう身を守るかといった安全への切の口が加わっているように。

インテリア事業は、主力のカリテで、抗菌・抗ウイルス商品の開発力を入れます。20年1~3月の業績は計画通りに推移し、4月はこの削減にとどめまされ、単独での生活で、最初が目が向いたのは、掃除や洗濯。今後ますます自宅空間に合ったインテリアが大事にされるため、落着込みは少ないと見ています。

衣料・キッズスタイルは。1~3月は順調で、4月以降は先が読まれません。今売れている服は、日常的に着やすいカジュアルなもの。着飾って外出する

あるところ敵り、僕らの主戦場であるエリガントは服は敵しい。北陸地方の糸加木もタメジを穿けるでしょう。協力工場では、生産調整や、国からの支援を受けるための手続きをどんどん進めたいと思っています。

悪いことをやかく言ってもしょうがありません。諦めて覚悟を持ち、次の手を考えてどんどん打っていきべき。先行き不透明な状況ですが、そうすれば未来が開けてくる。僕は今が常に出発点という気持ちです。当社は、新築費に毎年一億円を投資しています。資金繰りに余裕があわけてはなりません。環境が目のまわしく変わる中、うらななく未来はないという危うさがあるの先に投資です。

アファターノナ市場で勝負するため、今のうちにしっかりと準備しなければなりません。武器がなければ、他になんか強み。我が社であれば、分蔵エリガントを中心とした薄地綿物であり、開発の手を止めないことで

記者メモ

コロナ危機で先が見えず、不安に立ち止まった経営者も多いはず。取材を始める前、言葉を選びながら近況を伺うと、「やることが山ほどある。楽しくて仕方がない」。いつもの明るい調子でそう返ってきた。「気力も体力も、青春まったただ

や」と社内をも走り回る姿は、若手よりも元氣だ。

ただ、先行きを楽観視しているわけではない。とりわけ、ファッションテキスタイルの事業環境は「非常に厳しい」。それでも、前向きに次の手を打ち続ける原動力は、学生時代に導かれた禅の教えにある。当時は、政治力、経済力を持ち合わせた経営者の兄に勝つヒントにしたが、「自分と向き合った分だけ、自己実

現できる」。変化量で言えば5年先の瞬間とこの瞬間との教えが、いったいどうできる柔軟な条件だから、りどころと要であるとした。

開発力と一貫体制で世界に攻め入る

拡大の影響をどう見ている。

「現場に体を持っていく」といふことを信条としています。現場の隅々まで目配りし、リーダーシップを執るためです。

拡大の影響をどう見ている。問題は消費者の気持ちが続縮していること。目先の需要は変化している。中長期的な視点に立てば、生活自体は大きく変わるものではないのだけれど、たとえば、根拠は必ず、「ライフスタイルを豊かにしたい」という欲望がある。これに、新型コロナウイルスからどう身を守るかといった安全への切の口が加わっているように。

インテリア事業は、主力のカリテで、抗菌・抗ウイルス商品の開発力を入れます。20年1~3月の業績は計画通りに推移し、4月はこの削減にとどめまされ、単独での生活で、最初が目が向いたのは、掃除や洗濯。今後ますます自宅空間に合ったインテリアが大事にされるため、落着込みは少ないと見ています。

衣料・キッズスタイルは。1~3月は順調で、4月以降は先が読まれません。今売れている服は、日常的に着やすいカジュアルなもの。着飾って外出する

あるところ敵り、僕らの主戦場であるエリガントは服は敵しい。北陸地方の糸加木もタメジを穿けるでしょう。協力工場では、生産調整や、国からの支援を受けるための手続きをどんどん進めたいと思っています。

悪いことをやかく言ってもしょうがありません。諦めて覚悟を持ち、次の手を考えてどんどん打っていきべき。先行き不透明な状況ですが、そうすれば未来が開けてくる。僕は今が常に出発点という気持ちです。当社は、新築費に毎年一億円を投資しています。資金繰りに余裕があわけてはなりません。環境が目のまわしく変わる中、うらななく未来はないという危うさがあるの先に投資です。

アファターノナ市場で勝負するため、今のうちにしっかりと準備しなければなりません。武器がなければ、他になんか強み。我が社であれば、分蔵エリガントを中心とした薄地綿物であり、開発の手を止めないことで

記者メモ

コロナ危機で先が見えず、不安に立ち止まった経営者も多いはず。取材を始める前、言葉を選びながら近況を伺うと、「やることが山ほどある。楽しくて仕方がない」。いつもの明るい調子でそう返ってきた。「気力も体力も、青春まったただ中

や」と社内をも走り回る姿は、若手よりも元氣だ。

ただ、先行きを楽観視しているわけではない。とりわけ、ファッションテキスタイルの事業環境は「非常に厳しい」。それでも、前向きに次の手を打ち続ける原動力は、学生時代に導かれた禅の教えにある。当時は、政治力、経済力を持ち合わせた経営者の兄に勝つヒントにしたが、「自分と向き合った分だけ、自己実

現できる」。変化量でれば5年先の瞬間とこの瞬間との教えが、いったいどうできる柔軟な条件だから、りどころと要であるとした。



——競合しめくフアッシュ
ンテキスタイル市場に、後発で
挑んだ。
当社はインテリア事業が7割
を占め、それに次ぐ柱が、分繊
オメガザを中心とするブライ
ダル向けの薄地織物でした。し
かし、近年のなほ婚^①、地味
婚^②スタイルの隆盛で、ブライ
ダルの需要が急速に縮
小。当社は国内ブライダル市場
の7割を押さえていたしなか
ら、影響は甚大でした。分繊オ
メガザをはじめ、得意の薄地

——日本市場と同時に、欧州に打って出た。

日本の物作りの
魅力をみせる

近頃のファッショントレンドを語る上で欠かせないシアター素材の代表格、オーガンディ（オーガンザ）。サンゴロナ小田は、糸を分割して極細のモノフィラメントを作る分繊技術を核に、オーガンザをはじめとした合繊薄地織物に強みを持つ企業だ。5年前に衣料テキスタイルの軸足をブラダルからファッショントレンドに移し、国内外の有力デザイナーブランドを中心に順調に販路を拡大している。環境の厳しいファッショントেকスタイルに参入した理由とビジョ

織物が生きる場所を探し、行きついたのが、ファッション市場です。ただ、ファッション向けには既に、強大な先行企業がいくつもあり、全方位的な売り方では生き残れない。オーガニザの強みを生かすためにも、エレガンス分野に的を絞ることにしました。

りの力は、世界で突出している
と思うからです。日本は農耕民
族を背景として、田んぼを耕す
ように、一つのことを深掘りす

おだ・ときお 1945年石川県生まれ、日本大学卒。70年に家業の小田合織工業に入社、東海レース出走。75年に小田合織工業を退社し、サンコロナ代表取締役に就任。グループ会社の小田ゴウセン、小田テックス、谷口合織の代表取締役を歴任し、13年から現職。健康の秘訣（ひけつ）はホットヨガや登山。

る精がある。だから、技術が残つてゐる。狩猟民族だった中国には、もうからないとすぐやめてしまうから、技術が残つてゐない。

問題は出口戦略です。「日本は技術がある。日本人は内向きで世界に技術を開くことをしない」。前田勝之助東東社長が20年以上前に講演で述べたおれたことが、今もそのまゝではなでしょうか。出口戦略がなければ、ビジネスに成功はない。

当社が推す「出口戦略のポイント」は大きく二つ、一つは海外の「エージェンシー」と「取引」ではなく「エクスポート」にある。もう一つは「インバートレ」。イタリアの織物産地で活躍する「コディネーター」のような職種で、素材から製品に至るまでの知識、市場動向の双方を把握し、自ら企画する。希少な商品を見極めて提案する。

力、次の時代の新しい魅力を打ち出す力も求められます。世界に日本の技術をつなげるには、インパナトリーが必要です。海外部隊で今、インパナトリーをモデルにしたコンパナトリーシステムを構築しようとしています。僕らの商品だけでは足りない、僕らの想いが北陸産地の商品を含めた「コーディネートし」、日本の技術の世界に広ぐ大きな橋渡しが、実際に今、進んでいる商談もあります。

インテリア事業は以前からコンパナトリーシステムを取り入れてきました。自社の糸加工、生地、開発とオーダーで物作り、得意先の中国、ベトナムの縫製拠点、製品として、各小売店に直接販売する。その流れの中で、デザイナーがフィードバックを蓄積し、売れる商品を顧客に提案する。これをファッション向けにも適用し、アパレルに直接売る仕組みを整えていきます。

――ファッション向けを始め

て5年、今の到達は、
想定よりも順調です。コンバ
ーテーションを実現するの
は、とても難しかったと思っ
ていますが、海外では仕組
みが整っていたので、アパ
レル、つある。国内でも、
と取り組む型の商売ができて
います。企画が入って提案
していただく理想的な形が
できています。
人材も育ってきました。プ
ライタルとコミュニケーション
化もヘッドも違うので、営業
にアパレル経験者を雇った
のですが、ようやくその子
たちが前に出て商売する
ようになってきました。た
ま、営業でも技術的な知識
が欠かまなかったら、お客
さまに「お話を聞いて困
っている」と聞き、糸をど
ろおれば解決するかも、示
せばいいじゃないか、大変
なことじゃないか。アッ
ションが好きという気が
つきました。アッショ
ンをエンジンに、知識を
身に付けて、感性を磨い
てくれています。

■サンコ罗纳小田 1955年創業。13年にインテリア・レースカーテン事業のサンコ罗纳と、分繊糸などを加工製造・販売する小田ゴウセンを事業統合し、商号をサンコ罗纳小田に変更。糸加工から製織、染色、縫製まで自社で一貫できる体制を構築した。本社は大阪。サンコ罗纳小田グループとして国内に4社、海外に5社（中国4社、ベトナム1社）を構え、インテリアやファッション向けの生地製造と縫製、分繊や仮燃りといった糸の加工製造と販売をグローバルに行う。主力は、カーテンを中心にとしたインテリア事業で、全体の7割を占める。新規事業として、分繊技術をベースに炭素繊維複合材料「フレックスカーボン」も開発し、自動車やスポーツなどの用途も開拓している。



2000アイテムを多色で在庫し、特殊な生地も短納期で供給する

て5年、今の到達は

「ターシスシステムを実現するのは、とても難しいと思っていますが、海外では仕組みが整いつつある。国内でも、アパレルメーカーと取引組み型の商売ができてきました。企画から入って提案していくという理想的な形ができています。」

人材も育ってきまして、アイデアとフロンションでは、文にアパレル経験者も雇ったのですが、ようやくその子たちが前に出、商売も上々になってきました。うちはターカードなんて、営業でも技術的な知識が欠かされてん、お客さんから困っているのを聞き、糸をどう変えれば解決できるかまで示さなければいけない。大変ですが、アッシンが大好きな気がついたらエッセンに、知識を身に付けて、感性を磨いてくれています。

や」と社内をも走り回る姿は、若手よりも元氣だ。

ただ、先行きを楽観視しているわけではない。とりわけ、ファッションテックスタイルの事業環境は「非常に厳しい」。それでも、前向きに次の手を打ち続ける原動力は、学生時代に導かれた禅の教えにある。当時は、政治力、経済力を持ち合わせた経営者の兄に勝つヒントにしたが、「自分と向き合った分だけ、自己実現

現できる」「大事なことは持ち高より変化量で、未来に向かって変化すれば5年先、10年先大きく変わる。この瞬間どうするか」といった数々の教訓が、今の経営理念の基礎になったという。環境変化に迅速に対応できる柔軟性は、持続的な成長の必須条件だが、同時に、意思決定の拠りどころとして、ぶれない信念が重要であると改めて感じる機会となった。（橋口惺佳）

記者メモ

コロナ危機で先が見えず、不安に立ち止まった経営者も多いはず。取材を始める前、言葉を選びながら近況を伺うと、「やることが山ほどある。楽しくて仕方がない」。いつもの明るいついででそう返ってきた。「気力も体力も、青春まったなか